

みられる親切な解説（芸術家・芸術・論争など）や有益な参考文献の指摘は初学者や全くの門外漢にとって本書の理解を「層深めるのに役立っている。フランスルネサンスの諸特質とアナール学派の原点を紹介するという前述の二つの意図をもつてこの翻訳にかけた訳者の永年の意欲と誠意が充分に伝わってくるように思われる。フェーヴルの遺著や論文が今後さらに紹介されることを訳者の労に期待したい。

（四六判）一八一頁 一九八一年五月

創文社歴史学叢書 一八〇〇円
（森原 隆 京都大学大学院生）

R・H・C・デーヴィス著

柴田忠作訳

『ノルマン人』

——その文明学的考察——

本書は、R. H. C. Davis, *The Normans and their myth*, London, 1976 の邦訳である。

本書における問題設定は、一言にしていえば「ノルマン人とは何か」ということである。著者は、従来の歴史家がノルマン人

をそのまま単一の民族であったと確信してきたことを問題とする。そして、ノルマン人がフランス人なりイタリア人なりイギリス人なりに姿を変え、ついには一三世紀にはいとも簡単に消してしまったことから、ノルマン人がノルマン人たりえたのは、客観的実体としてノルマン人が存在したからではなく、一つの神話を信じるることによって結びつけられていたからであり、その神話が崩れた時にノルマン人はノルマン人ではなくなったのであるとする。

以下、その「神話」がどのようなものであったかということが、ノルマンディ公領の成立及び発展、イタリアにおけるノルマン人の活動、イングランド征服といったいわゆるノルマン人の活動を通じて論じられる。すなわち、一一世紀に強力なノルマンディ公領が形成されたノルマンディにおいては、それまでフランス人と同質化していたノルマン人が、特に一二世紀に反動的にノルマン人の英雄を取りあげること、自らを自由戦士とみなすこと、ノルマンディという統一体への帰属意識を持つこと、ノルマン人としての不敗信仰を持つことによって、ノルマン人の神話が成長する。この神

話は、イングランド征服において最盛期を迎えるが、イングランド征服は同時にノルマン人のイギリス人化という現象を生みノルマン人の危機を迎える。その後のノルマン人の敗北の連続はノルマン神話を消しさり、神話によって結びつけられていたところのノルマン人という民族は存在しなくなるのである。

さて、本書は、われわれが当然実在していたものとして把握していた「ノルマン人」の存在そのものに疑問を投げかけ、再考を促した点に注目できる。デーヴィスによれば、ノルマン人が自分たちの創り出したノルマン神話を信じる限りにおいて一つの民族であったわけだが、このような理解は「心性の歴史」との関連を想起させ、興味深い。

但し、本書を読む際にはここで取り上げられているのが、特殊イギリス的見方による「ノルマン人」であることに留意する必要がある。すなわち、ノルマン人とはまさにノルマンディにあつて、そこから征服活動を行った人々を指す。ところで、大陸の歴史家においては、北大西洋からロシアにいたるまで広汎な活動を行った「北の人

人」の総体を指し、この見方は、本書の「解説」において訳者が示しておられるように、わが国においても一般に受け入れられているといつてよからう。本書の考察の対象となっているノルマン人の活動は、その中ではノルマンディを中心とした第二次活動とでも言うべきものであるから、本書の「ノルマン人」と日本における一般認識による「ノルマン人」との間には当然ギャップがあるわけである。この相違を念頭においておかねば誤解を生む恐れがあるように思われる。本書においてノルマン人の解説を付け加えるならば、この相違点を指摘しておいた方が望ましかったのではなかろうか。

次に、著者デーヴィスによる「ノルマン人」理解に関して感じられた点を若干述べてみたい。

著者は、ノルマン人の民族としての基盤をノルマン人と呼ばれた人々の自意識に求めるというアプローチをとっている。ところで、このようなアプローチをとれば、ノルマン人の手になるノルマン人の歴史の検討は十分になされるであろうが、外からみた「ノルマン人」像はなおざりにされるの

ではなかろうか。外からの「ノルマン人」像は、決してノルマン人自身の歴史の亜流ではなく、ノルマン人理解にそれ自体独自の意義をもつものである。それにもかかわらず、外からの視点が軽視されていることは、そこから生まれる「ノルマン人」理解を一面的なものにしているように思われる。

さらに、ノルマン人としての民族性をノルマン人としての自意識、ノルマン的性格への信仰に求める視点には疑問が生じる。著者は主としてノルマン信仰の高揚を一二世紀にみているが、それでは、著者がいうところの「ノルマン的性格」を持ちながらいまだノルマン人への信仰を持たぬ人々、少なくとも信仰を明らかにしていない人々、たとえば一一世紀のノルマンディの人々はどうのように位置づけられるのだろうか。著者は、一三世紀にノルマン人が消えてしまうことからその視点をうちだしたのだが、ノルマン人の出現についてはいまひとつはつきりしていない。これは、実際に史料に現れ、従来のノルマン史家たちが「ノルマン」的性格を持つとしてきた「ノルマン人」の形成と、著者がノルマン人の定義づけに用いたノルマン神話の形成とのあいだ

にはずれがあるためであろう。

その次に取り上げたいのは、イタリア及びシチリアにおけるノルマン人の活動の把握である。著者は、イングランド征服については段階を追って意識の移りかわりをみるのに対して、イタリア及びシチリアにおけるノルマン人については、二世紀にわたる活動であるにもかかわらずノルマン人としての自意識に欠けると一言で片づけ意識の変化をみようとししない。イタリア及びシチリアにおけるノルマン人の活動を伝える年代記等を検討すれば、一一世紀のいわば征服の時代と一二世紀のシチリア王国創建後の時代において「ノルマン人」の取扱いに違いがあり、特に一一世紀においては「ノルマン人」の認識がかなり明確なものであったことがわかる。確かに、イタリア及びシチリアにおけるノルマン人は、故国ノルマンディから離れてしかも決して多数とは言えないが、著者のように全く意識の推移を認めようとししないのはやはり問題であらう。

また、著者の位置づけによれば、イタリアのノルマン人はノルマン神話を信じていないからノルマン人とはいえないが、一方

ではロベール・ギスカールらの活躍がノルマンの不敗信仰を創りあげるのに寄与しており、その意味ではノルマン人の範疇にはいることになる。つまり、ここにまたノルマン人であってノルマン人でない存在ができてしまう。一一世紀のノルマンディの人人にせよ、イタリアのノルマン人にせよ、著者の定義ではこのように不明瞭な位置づけしかできないとすれば、定義づけ自体に問題があると言わざるを得ない。

実際、著者デーヴィスは、ノルマン人を一つの客観的存在としての民族とみなすことに對する疑問から出発し、神話による結びつきによる民族を強調したのだが、むしろ彼の考える「ノルマン人」が民族といえるのかという問題に邂逅することの方がよりよくその実体に迫りえるのではないだろうか。たとえば、著者がノルマン神話の命題の一つとして挙げている「ノルマンディという統一への帰属意識を持つこと」にはもっと大きい意味をもたせることができるように思われる。すなわち、ノースマンの支配によって生まれたノルマンディに住み、あるいは、ノルマンディからやってきた人々こそノルマン人（第二次）であり、イン

グランドやイタリアへ赴いたノルマン人の子孫がノルマン人でなくなったとすれば、それはノルマンディから切り離されていったからであると考えられよう。そして、一

三世紀にノルマン人が姿を消すとすれば、それはノルマンディの地位が低下し、フランスの中の一地方人の意味しか持たなくなつたためであるとは考えられないだろうか。以上、本書を手にして感じられたことを幾つか述べてきたが、何よりもノルマン人（第二次）の理解に一つの新しい視点を提供してくれるその意義は大きく、この邦訳を大いに歓迎したい。なお、訳には一部に不適當と思われるところもあったが全般に読みやすく、また多くの写真が載せられていてわかりやすいものとなっているので、「ノルマン人」についての入門書として活用することも可能であり、多くの人が一読されることを期待したい。

（四六判 二〇五頁 一九八一年七月
刀水歴史全書一〇二二〇〇円）
（山邊規子 京都大学大学院生

受贈図書

（一九八一年一月二七日～四月二三日）

三康文化研究所所報 一五

日本史研究（日本史研究会） 二二一

史迹と美術（史迹と美術同政会） 五二一

研究紀要（尾道短期大学） 三〇

韓国史研究彙報（韓国国史編纂委員会）

三一

神道史研究（祇園八坂神社） 二九一

民族学研究（日本民族学会） 四五—三

奈良大学紀要（奈良大学） 九

井上鋭夫著 山の民・川の民（平凡社）

文学会志（山口大学文学会） 三一

神道学（出雲大社神道学会） 一〇八

斯道文庫論集（慶応義塾大学斯道文庫）

一七

神道史研究（八坂神社神道史学会） 二八

一四

文学部論叢（立正大学文学部） 六九

鹿児島経済大論集（鹿児島経済大学） 二二

一四

東洋学文献類目（京都大学人文科学研究所）

一九七八年度

民族研究（北京民族研究雜誌社） 一九八